

## 東京通詞魏氏の家系

— 魏五左衛門龍山を中心に —

若 木 太 一

### The family of Tonkin (東京) - Interpreter Gi-shi (魏氏), with Special Reference to Gi-Gozaemon-Ryūzan (魏五左衛門龍山)

Taichi WAKAKI

はじめに

東京通詞魏五左衛門は同家編纂の唐蛮会話辞書『譯詞長短話』、それを表記した特殊な「魏氏仮名文字」、および同系の仮名文字を用いた『東京異詞相諺解』『南詞諺解』などの辞書との関わりで注目される人物である。

これまでに武藤長平<sup>注1</sup>、古賀十二郎<sup>注2</sup>、増田廉吉<sup>注3</sup>、中田喜勝<sup>注4</sup>、大橋百合子<sup>注5</sup>、不破浩子氏<sup>注6</sup>らによる報告・考察があり、とりわけ魏氏の家系については宮田安氏の調査<sup>注7</sup>が備わる。本稿はこれまでの研究をふまえて、長崎大学経済学部武藤文庫蔵の未紹介資料を加えて辞書編

纂者である東京通詞魏氏の家系と活動を追跡してみたいと思う。

#### 一 東京通詞 — 東京久蔵 —

長崎の通訳は、阿蘭陀通詞と唐通事に大別される。これらの中にあっていわゆる奥船にかかわる暹羅通詞、東京通詞、莫臥爾通詞は『訳詞統譜』の中では大ワクで唐通事方に含めるものの、異国通詞と称して別扱いとなっている。

『補華夷通商考』（西川如見）では中華十五省（二京十三道）の外に「外国」として「朝鮮・琉球・大宛・東京・交趾」をあげ、「右ノ国ハ唐土ノ外ナリト云ドモ、中華ノ命ニ從ヒ、中華ノ文字ヲ用、三教通達ノ国也」という。これにたいして「外夷」として「占城・柬埔寨・太泥・六甲・暹羅・母羅伽・莫臥爾・咬啗吧・呱哇・番且・阿蘭陀」をあげ、「右之国々ハ唐土ト差ヒテ、皆横文字ノ国也」と説明する。

「東京」は現在のベトナムの北部ハノイ一帯、「暹羅」はタイ、「莫臥爾」はかつてのムガル帝国、インドの南西部である。東京にはたとえば長崎から出て住みついた貿易商和田理喜左衛門、暹羅には伊勢山田の産で駿河府中の山田仁左衛門一党がおり、時おり東京船、暹羅船が長崎へ来航することがあった。両国には昔から住み着いた日本人の子孫もあり、また阿蘭陀船、唐船もこれらの国々から物資を仕入れ、貿易品として長崎へ運んだ。また、こういった奥船には唐船の乗組員として暹羅・東京・柬埔寨人などが雇われていたり、暹羅船に莫臥爾人が乗組んで来航したりするので、暹羅、東

京、モウルの通詞の必要はあったのである。

『訳詞統譜』の〈東京通事〉の条には明暦年中に「東京久蔵」と称する者がいて、その初代に置かれている（後掲）。東京久蔵の経歴はよく判らないが『通航一覽』巻百四十八「長崎港異国通商総括部」に次の『長崎記』の記事を引く。

（前略）異国通事三人、一人前に二石六斗七升五合、但、一日に五合宛三人御扶持方の積、請取申處如件、

寛文十年戊十二月

森田長助 印 ろくせん通事  
東京久蔵 印 東京通事  
末永五郎助 印

末次平蔵殿

表書の通被相渡候、断は東文有之候、以上、

戊十二月廿二日 河野権右衛門 印

末次平蔵殿

右異国通事は夏冬兩度に請取之（後略）

この文書は阿蘭陀通詞及び異国通詞の待遇に関する取決めを長崎奉行河野権右衛門から代官末次平蔵宛に通達したものである。寛文期には暹羅通詞森田長助、呂宋通詞末永五郎助、東京通詞東京久蔵の給与は阿蘭陀通詞の稽古通詞程度であった。彼らはこれに對し、（一）当方の意志を異国人に有体に申し聞かせ、また異国人の言う事を偽りなく申し上げるべきこと、（二）吉利支丹宗門の道具類、書物などについては入念に調べること、（三）お上の威光をかざして諸人に慮外の事をしないこと、を記した起請文を奉行に差出し、忠勤を誓った。

東京久蔵については『唐通事会所日録』元禄元年（一六八八）の条に記事がある。同年八月二日、薩摩から送られて来た二人の異形の外国人が何国の者か判明せず、立山奉行所へ唐通事彭城宣義、頼川藤左衛門、彭城久兵衛、その他阿蘭陀通詞、モウル通詞、暹羅通詞及び東京久蔵ら主な公儀通詞たちが召寄せられた。しかしこの時通詞らはいずれも通弁ができず、福州船の船頭に見せた結果、彼らは台湾付近の者で海南（広東）船の乗組員である唐人が見知った者であると口書を差出し、一件落着した。通詞の対応の限界が知られる事例である。

## 二 魏氏の渡来と時代背景

さて東京通詞魏氏とはどのような家系をもつ人々であろうか。『長崎実録大成』第十一卷「唐船入津並雜事部」の寛文十二年（一六七二）の条に次のように記す。

一 魏九官、之琰、其子高、同貴、僕喜四人渡海シ、依頼長崎在住御免、日本人ノ形ニ成ル。子鉅鹿清左衛門、同清兵衛、僕魏五左衛門トナル。

この魏九官こと之琰（援）は福建省生れの中国人で兄魏毓禎とともに東京に移住し、東京と長崎間の貿易活動を行っていた。長崎への来港が重なり、寛文十二年に帰化を申し出た。『寛宝日記』寛文十二年の条に「右同年（寛文十二子）、東京九官長崎<sup>五</sup>住宅被仰付被下候様ニ内々訴訟申上候、就夫御赦免被成住宅仕候、倅式人御座候ハ日本人ニ罷成、下来屯人御座候」とある。元禄十七年刊『長

「崎虫眼鏡」上巻には「魏九官 同子清左衛門 同清兵衛 家来嬉／＼右四人は寛文十式子のとし御ねかひ申上、日本に住宅御赦免ありて、子息式人、延宝七末のとし日本人の姿となる」とある。つまり魏之琰一家は寛文十二年に長崎住宅唐人がゆるされ、延宝七年（一六七九年）に「鉅鹿」の姓を名乗ることになった。これについて『譯司統譜』には次のように説明する。

本姓魏氏、其先、鉅鹿郡ニ出ヅ、因テ氏ス、寛文ノ末、鉅鹿氏匿名ヲ魏九官ト稱シ、二子一僕ヲ携テ、長崎ニ流寓シ居レリ、先是、九官奮志、明室ヲ恢興セント、朱舜水ト俱ニ、往テ安南國王ニ説シ、就テ援兵ヲ乞フ、時二明王由榔、蒙塵ノ緬甸ニ寄駐ス、吳三桂不軌ヲ懷キ清ヲ篡ハントノ企ニテ、朝ニ奏シ為メ二明ノ根葉ヲ断ヤサント請ヒ、緬甸王ニ授意シ、明主ヲ執ヘ取テ之ヲ弑シ、明遂ニ亡ブ、九官事為ス可キ無ク、東京奴喜一ヲ従ヘ、郷里ニ奔回リ、長子高、次子貴、僕喜ヲ携ヘ、崎ニ来テ爰ニ家ス、時唐商ノ通舶處ニ安南港門アリ、奉行喜一ヲ用テ東京通事ト為ス、因テ鉅鹿ノ本姓ヲ冒シ、魏五右衛門ト稱セリ、譯家ノ魏ハ只此一姓ノミ、職卑キヲ以テ未ダ此冊ニ登ラ不ル也、鉅鹿ノ後、今赫太郎在リ。

右の記事で「鉅鹿郡」に因む名乗りとするが、その根拠は未詳。「鉅鹿」は、秦、漢時代からの古い地名で北京の南西部に位置し、現在は河北省平郷県に属する。帰化して唐通事となった人たちは、

その姓にこの周辺の地名を採って河間、清河、潁川などと名乗る例が少なくない。「鉅鹿」はおそらく先祖の出身地ではなからうか。

一七世紀の半、すでに明朝は女真族ヌルハチおよび二代太宗の進攻によって滅亡への道をたどりつつあった。知られるように、わが国の正保二年（一六四五）以来、明王朝復興のために鄭成功は「日本乞師」を差し向けて援軍を求めたが幕府はこれに応じなかった。

その渦中に朱子瑜（舜水）もあって、明の再興のために働いた。交趾、暹羅の間を漂泊し、また長崎、安南の間を幾度も往来することがあったという（「明徵君文恭先生碑陰」）。魏九官は監国魯王の勅を蒙った朱子瑜とともに安南へ往き国王に援兵を乞うたが、かえって捕えられ虜となった。そのころ明の桂王由榔は難を避けて緬甸（ビルマ）に身を寄せていたが、吳三桂の裏切りにあつて弑され明は滅亡するに至った。魏九官は為すすべもなく、東京奴喜一を従えて郷里（福州府福清縣）へ帰り、やがて長子高、次子貴、僕喜を連れて寛文十二年（一六七二）に長崎へ渡来したというのである。

それに先だつて朱子瑜は安南、長崎間を数回往来していたが、鄭成功の南京攻略が失敗した万治二年（一六五九）冬には長崎へ流寓しており、柳河の安藤省菴の世話を受け、寛文五年（一六六五）夏には光圀から招聘されて水戸へ赴いている。経史を講じ、好学の氣風を育み、その後の水戸学に多大の影響を及ぼしたことは周知のことであるが、天和二年（一六八二）四月十七日、波瀾に富んだ八十三年の生涯を終えた。

一方、鉅鹿氏と称した魏九官一家は東京貿易で財を成し、延宝七

年（一六七九）には中島川に石橋を架設、翌年は松森神社の大門を寄進し（『長崎実録大成』第四卷）、また崇福寺の檀越として大雄宝殿重層の附加、媽祖堂門などの寄進を行なった。長子清兵衛は唐大通事劉宣義の娘を妻とし、姻戚関係においても住宅唐人の名家の地位を得ることになった。かくして魏之琰は元禄二年（一六八九）一月十九日長崎で没した。享年七十三（『唐通事会所日録』三）。明末清初の東アジアの政治状況が生み出した文化交流の一齣である。

### 三 東京通詞魏五平次

東京通詞を勤めることになる魏氏とは、前章の魏之琰一家の従僕として渡来した「僕喜」（『実録大成』、「家来嬉」（『長崎虫眼鏡』）のことである。『譯司統譜』〈住宅唐人之覚〉には、右魏子琰一家の後に次のように付加されている。

寛文十二子年ヨリ

一天和三亥年迄日本人二成り

五平次ト申候

右九官僕東京生レ  
魏 喜

すなわち魏喜は東京人である。生れ育った自国の東京語は堪能であり、それゆえ中国人である主家の魏子琰ではなく魏喜が東京通詞に任命されたのは当然のことであつたと思われる。

『譯司統譜』の〈東京通事〉の条には次のように歴代が記されている。

一明暦年中

一元禄十二卯年四月廿九日被

仰付候

寛文十二子年魏九官三附添致

渡海候住宅唐人喜東京人

正徳二辰年二月六日 病死

一正徳二辰年四月十三日被

仰付候

一宝暦七丑年

一天明元丑年十月十五日被

仰付候

天保一四卯年六月二日御

暇御免六十三ヶ年相勤候

二付御褒美銀被下置候

一是迄見習被仰付置候處天

保十四卯年六月二日父跡

相統被仰付御扶持方并受

用銀御手當共是迄通被下

置候

安政二卯年四月廿四日阿

蘭陀通詞被仰付都テ暹羅

へ被仰渡候通

東京久藏

久藏跡役

魏 五平次

父五平次跡

同五左衛門

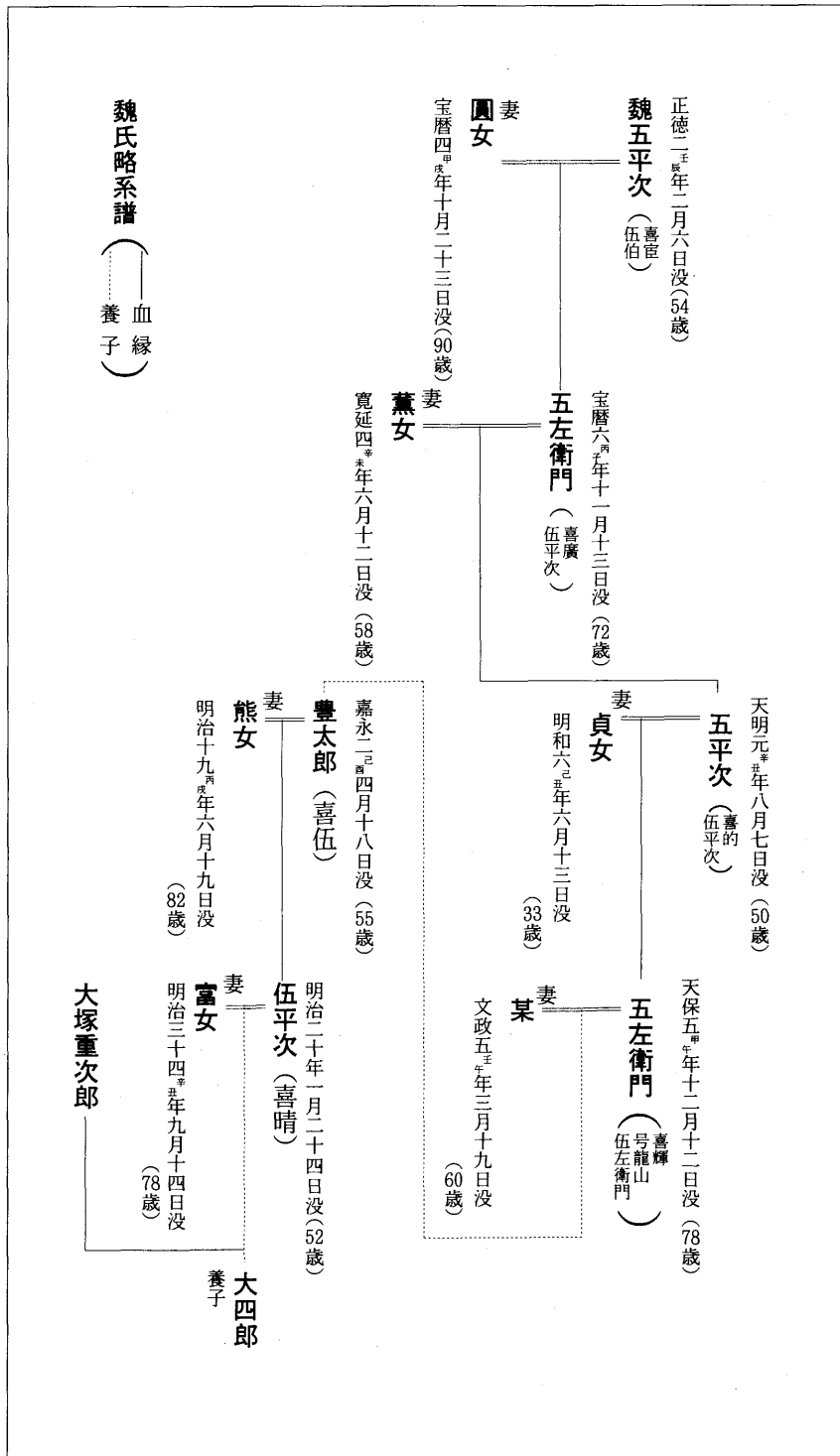
同人跡

同 五平次

同人跡

同五左衛門

魏 豊太郎



これによって元禄十二年四月二十九日付で東京久蔵の跡役に魏喜こと五平次が任ぜられ、その後は、五左衛門―五平次―五左衛門―豊太郎と幕末までの系譜が知られる。

長崎県立図書館所蔵の渡辺文庫には渡辺庫輔氏書写による「魏氏系図」がある。原本の所在が確認できないが、右に掲げた『譯詞統譜』と照合するとほぼ一致し、一部その俗名に相違がみられるが、それも一時親の名乗りを継いだものとみてよいもので、信頼しやすい系図だと考える。

そこで両資料を校勘して照合し、魏氏の家系の再現を試みると、私見では、およそこのようになる（前ページ参照）。

さて日本へ渡来して東京通詞となった魏五平次は諱は喜臣、字は伍伯、正徳二年（一七一二）二月六日病没した。享年五十四。逆算すると日本暦で万治二年（一六五九）、東京で誕生したと推定される。前述したように五平次こと喜臣は、寛文十二年（一六七二）十四歳のときに魏子琰親子の従僕として長崎へ渡来した。その後の具体的な生活は未詳であるが、おそらく成人するまで従僕として仕えていたのであろう。

五平次の妻は圓女という日本人で、宝暦四年（一七五四）十月二十三日に九十歳で没している。逆算すると寛文五年（一六六五）の生れである。息子の五左衛門喜廣の誕生が貞享二年（一六八五）であるから、この時五平次は二十七歳、妻圓女は二十歳である。二人の結婚はこの前年ごろではなかろうか。

元禄二年（一六八九）一月十九日、主人魏九官が病死した（『唐

通事会所日録』三）。その跡は長子魏高（清左衛門）、次子魏貴（清平衛）が継いだ。東京船へ出資の貸付銀は両子息へ返済するよう唐大通事官梅道栄らのはからいで奉行所に認められた。

『唐通事会所日録』三の元禄六年（一六九三）八月四日の条に、五島へ漂着の七十四番温州船と大村へ漂着の七十五番暹羅船が長崎港へ送られ、西役所にて奉行立会いのもとで御詮議が行なわれた記事がある。それには暹羅人四人と広南の男女十八人が乗っており、暹羅通詞森田権左衛門ら四名と東京通詞東京久蔵と喜（五平次）も呼ばれ、唐通事らもまじえて詮議が行なわれた。この折年番であった唐大通事彭城仁左衛門（宜義）と頼川藤左衛門に連れられて喜は広南人の氏名、年令、信仰などの調査にあたった。「年番兩人、喜、舟江參、廣南人之口、喜通し候て、則船頭・財副・夥長二其旨書付致させ取申候、和ケ・真ノ物共二、西へ上ケ申候得ハ、此通二而能候へ共、口之序文ハ不入物二候、其わけ、風説二も、廣南人共口書二も、委細二有之候間、名・年計書せ候て、和ケ相添上ケ可申由被仰付、則御意之通又認直し、重而西へ上ケ申候へハ、此通二而能候」とある。この時喜（五平次）は「廣南人之口」すなわち安南語（ベトナムの北方の言葉）の通弁が認められ、その口書及び風説書の和解（わけ）も丁寧に作成し直し、西役所、立山役所へ差し出し、その能力が知られるに至ったようである。

ところでこの「廣南人之口」と東京語とは同系の言語である。「廣南府」は雲南省の一つで、『長崎実録大成』第十巻では「廣南東京」について「昔年ハ安南、東京一國ニテ交趾ト稱ス。其後安南ヲ

廣南ト稱ス。東京ハ王都ニテ廣南ニハ鎮守官ヲ居置テ臣トス。或ル一代東京國王妻ノ弟ヲ安南ノ鎮守ニ遣ス處、如何ナル事ニヤ變起テ東京國王ノ命令ニ随ハス、國中ノ人民モ互ニ往來無之、遂ニ別國ト成レリ。(中略) 漢字ヲ用ヒ衣冠モ明朝ノ製法ヲ用ユ」と説明する。交趾國が分裂して安南、東京に分れ、さらに安南は廣南と称されるに至った経緯をいう。長崎奉行は鎖国政策の初期に南蛮人および混血日本人を追放した咬囉吧<sup>ジャガタラ</sup>を制禁とする以外は、右の廣南、東京、暹羅をはじめ占城<sup>チンペン</sup>、柬埔寨<sup>カンボジア</sup>については船数も少ないことから、信牌を与え入港を許していたのである。

元禄七年(一六九四)十一月二十七日、新奉行近藤備中守用章に對して、唐通事たちと同様に、住宅唐人として鉅鹿清左衛門、同清兵衛及び魏喜は誓詞を差し出した(『唐通事会所日録』四)。

元禄九年(一六九六)十月十四日、「八幡町魏五平次事、今度、水戸中納言様御家来吉田永徹ト中人當地江下り居被申候、則為御意五平次江戶永徹申由二而、則五平次願書并八幡町乙名・組頭奥判いたし持参仕候一通、右之書付今朝年番兩人ニ而御両所江差上申候處ニ、五平次事住宅唐人之偽に付、早速ニハ不被仰付候、御相談之上二而可被仰付由被仰渡候」(『唐通事会所日録』五)という。この記事は水戸水圀の命を受けた吉田永徹が、魏五平次を水戸へ招こうとして五平次の願書と居住地である八幡町乙名、組頭の奥判をついた申請書を年番通事を仲介して立山役所と西役所へ差出したことをいう。しかし同十八日、近藤用章、丹羽長守及び到着間もない諏訪頼蔭の三奉行相談の上、五平次は異国人であるから他所へ遣すこと

はできないと許可されなかった。

これと同じような例がある。延宝四年(一六七六)に朱舜水の息子大成の妻姚氏の甥が来た時も、舜水の孫朱毓仁が延宝六年に長崎へ来た時も面会は許されなかったし、舜水没後の貞享二年に渡来した時も長崎を出ることは許されず、墓参もできなかった<sup>註12</sup>。黄檗の高僧への特別な措置以外は、極めて厳重な禁制がなされていた<sup>註13</sup>。

元禄十二年(一六九九)三月二十七日、魏五平次は前年冬以来の申入れをしていた「東京久藏明跡之願書」二通を調べ、年番通事を通して奉行所へ請願した。おそらく久藏は前年死没し、その跡役相続の願書である。その一月後の同年四月二十九日、五平次は立山役所に召出された。「任舊例東京久藏同前之役儀ニ被仰付候、兼而兩國之通用仕候段被聞召付候間、向後随分念を入、東京・廣南之通事相勤候様ニと被仰付候」とあり、かつ「月代をそり風儀相替申候様ニと被仰渡」と記されている(『唐通事会所日録』五)。五平次はこの年日本人の姿に替り、同年五月三日東京通詞の誓詞を書写、提出し、正式に役儀を勤めることになった。四十一歳の時である。

その後の五平次の活動は『唐通事会所日録』によってわづかに知られるのみである。

宝永元年(一七〇四)八月二日、薩摩に漂流していた異国人六名が長崎へ送られ、大波止にてオランダ人に実見させたとところ三人はオランダ人、三人はイギリス人であることが判明した。その際、林道栄ら唐通事数名をはじめ暹羅通詞、モウル通詞および東京通詞五平次も詮議に加わった。九月十八日、彼らを蘭船に乗せて帰国させ

ることが決った(『同日録』七)。

宝永五年(一七〇八)四月十三日、西役所御白洲において両所奉行立合のもと、唐通事一同、及び暹羅、モウル、東京通詞五平次ら六名は、唐人方に小宿中の駐留唐人とは私的接触などしないとの誓約を記した証文を提出した(『同日録』七)。

正徳二年(一七一二)二月六日、五平次没。五十四歳であった(魏氏系図、『譯司統譜』)。「唐通事会所日録」は同年二月十三日の記事から始まっており、五平次死去については記録を欠き、事情は未詳である。

#### 四 二代五左衛門、三代五平次

父魏五平次の跡目を継いで東京通詞となるのは、息子の五左衛門である。諱は喜廣。「魏氏系図」では伍平次とするが、一時この俗称を名乗ったのであろうか。宝暦六年(一七五六)十一月十三日、七十二歳で没した。逆算して貞享二年(一六八五)の誕生となる。

『唐通事会所日録』九の正徳二年四月十二日の条に、魏五平次が病死したのでその跡役として忝五左衛門の相統願書を暹羅通詞森田権左衛門が奥判して持参したが、町年寄高木勘兵衛は年番通事高尾甚八に質したところ、先例と相違することが判り、翌十三日唐通事目付と年番通事二人、魏五左衛門ともに立山奉行所へ罷出て東京通詞役を仰付られた、と記事が出ている。

五左衛門の活動については他に見当たらないが、唯一その晩年の宝暦六年正月に記した「由緒書」がある。すでにその原物の所在は不

明だが、増田廉吉氏論から引用する<sup>註14</sup>

#### 由緒書

御扶持方 三人扶持 東京通事魏五左衛門

配分銀貳百六拾目 當子七拾貳歳

本國東京在住肥前長崎、正徳二辰年四月ヨリ翌年正月

有章院様御代從魏五平次跡式被仰付到當子年迄四拾五年相勤申候

一、父 魏 五平次

右五平次儀前名魏喜と申候寛永十二亥年東京より長崎に罷越居到

元禄十二卯年四月

常憲院様御代東京通事被仰付候節御扶持方三人扶持被下當正徳二辰年迄拾四年相勤同年一月五拾四歳にて病死仕候

右之通にて相聞申候

寶暦六年子正月

魏五左衛門

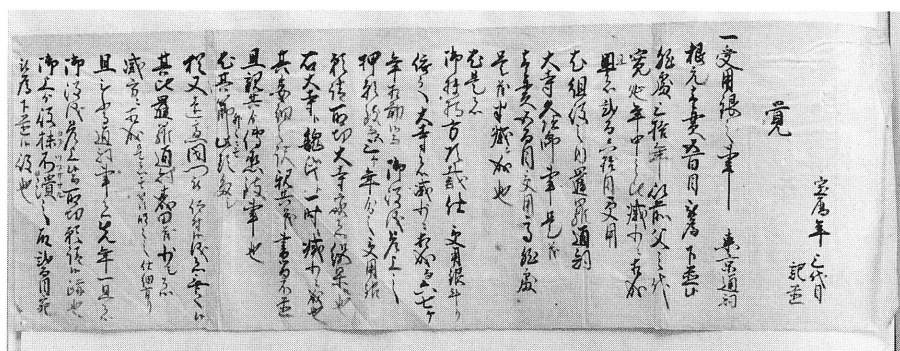
この「由緒書」は、魏喜の長崎渡来を「寛永十二亥年」(正しくは寛文十二亥年)と誤る他は「魏氏系図」や後に編纂された『譯司統譜』を裏付ける貴重な資料である。その待遇も唐方稽古通事の約六分の一の薄給であったこと、宝暦六年まで十四年間を勤めたことなどが知られる。妻薫女は寛延四年(一七五二)六月十二日、五十八歳で没した。

三代目五平次は、宝暦七年(一七五七)二十六歳で父五左衛門の跡の東京通詞を継いだ(『譯司統譜』)。「魏氏系図」によれば、諱は



覚 宝曆年 三代目記置

一受用銀之事 東京通事根元  
 老貫五百目被為下置候 然處  
 三拾年以前父之代寛延年中之  
 比減少二相成且者式百六拾目  
 受用尤組役之内暹羅通詞大寺  
 久次郎事は茂老貫五百目受用  
 高然處是茂半減二成也 尤是  
 者 御扶持方頂戴仕受用銀  
 計リ依之大寺者減少二相成而六  
 七ヶ年相勤候而御役儀差上之  
 押願致而五三ヶ年分之受用銀  
 願請取切大寺家者絶果ル也  
 右大寺ト魏氏ト一時ニ減少二成  
 也 其委細之訳親共茂書留不  
 置且親共傳<sup>マツ</sup>致事也 尤其  
 節此類多シ 猶又遠慮閉門被  
 仰付候儀者無之候 其比暹羅  
 通詞森田茂少シ者減方二相  
 成是者其節段々之任細有リ 且もふる  
 通詞事者先年一旦者御役儀差  
 上候而取切願請候跡也 御上  
 が役株不潰之故式百目宛被為下置候役也



① 覚 (武藤文庫『古文書集』1)

喜的、天明元年(一七八一)八月七日、五十歳没。逆算して享保十七年(一七三二)の誕生。妻貞女は、五平次より早く明和六年(一七六九)六月十三日、三十三歳で没した。

長崎大学経済学部武藤文庫蔵『古文書集』1に魏氏関係の文書が貼布、保存・収録されている。その内関連のあるものを取り上げる。次の魏氏文書(写真①)は署名はないが三代五平次の書置の写しと見てよいものである。

この「受用銀之事」は通詞の待遇の悪化を記した資料である。東京通詞は当初銀老貫五百目を支給されていた。しかるに三十年前父五左衛門の代の寛延年間に式百六拾目に減給となった。暹羅通詞大寺久四郎も老貫五百目から半減、その後五年分程の受用銀を願ひ請けて退職した。同役森田氏も減給、またモウル通詞も一旦は役儀を退くつもりだったが、役株は潰さないということで式百目の給与で留任している、という内容である。来航の船が少ないとはいえ唐通事、阿蘭陀通詞に比べて待遇は相当に低くおさえられていたのである。当時の『長崎分限帳』にも同様の待遇が記されており、以後はこれを基本にしたようである。

#### 五 四代五左衛門

この四代目五左衛門が『譯詞長短話』の編者として知られる魏龍山である。諱は喜輝、号が龍山。「魏氏系図」では名を佐左衛門とする。

父五平次の跡を継いで東京通詞となったのは天明元年(一七八一)

十月十五日である。武藤文庫蔵『古文書集』1には、「東京通詞」の魏氏代々を記した文書二葉が貼布されている。どちらも下書き風で精粗の違いはあるが内容はほぼ同じである。全体は省略するが五左衛門については「天明元丑年十月十五日被仰付候 五左衛門」と記されており、『譯司統譜』の記事が裏付けられる。没年は天保五年（一八三四）十二月十二日で、享年七十八。逆算すると宝暦七年（一七五七）の誕生。通詞職を二十五歳の時に継いだことになる。妻某は文政五年（一八二二）三月十九日、六十歳没（「魏氏系図」）。天明七年（一八一七）七月、入港した紅毛船に異国人四人が乗っており吟味が行なわれた。しかし、言語が通じなかったので出島内に留めておいた。まもなく安南人らしいことが判り、在館唐人と対談させたところ、安南国郷里の者で言語は十に二、三しか分らなかった。四人は漁師で関帝観音を信仰し、邪宗ではなかったので幕府の下知を仰ぎ、同年九月二十日紅毛船に乗せて帰国させた（『長崎志統編』巻九）。

この事件に関する五平次の文書「乍恐口上書」（『古文書集』1、写真②）が残されている。

乍恐口上書 水野若狹守出勤之節

一此度紅毛船が異国人連渡候ニ付私共被召出於 御役所ニ通弁仕候様被仰付候處言語相分不申候 然處安南人之様ニ風聞仕候間私先祖之儀者東京人ニ而安南口傳來仕申候ニ付何卒通弁相對等今一應御免被為仰付候者難有奉存候

東京通詞 魏五左衛門⑧  
右五左衛門奉願候通相遼無御座候 何分通弁等為仕申度於私



② 乍恐口上書（武藤文庫『古文書集』1）天明七年七月

共ニ茂奉願候 尚又私共儀得と人物等見置後年之書傳ニ茂仕度奉

存候ニ付相對等御免被為成下候様重疊奉願候

以上

天明年<sup>丁</sup>七月

モウル通詞

中原松之介<sup>印</sup>

※B

暹羅通詞

森田次太夫<sup>印</sup>

高嶋八郎左衛門殿

福田十郎右衛門殿

※A 未年阿蘭陀舟<sup>ヲ</sup>六月之廿四日夜七ツ時分御役所上ル 尤此時

東京口計リ懸候安南口ハ差ひかへ候 然處館内<sup>ニ</sup>六番舟之唐

人出テ安南人<sup>ト</sup>与言計リ也委細ニ不分

※B 早東御免有之五左衛門被召出七月十二日ニ出嶋之鮫藏之

二<sup>ハ</sup>皆<sup>ニ</sup>安南人居候出嶋仕役<sup>モ</sup>止ル也御檢使二頭御役所付二組

御連被成候て安南人と應對致通弁致候處長<sup>キ</sup>語談ハ分兼候

短キ事少々相分事也 則御檢使阿蘭陀方諸役人日用之物共見

物若牛殺スル也 異國通詞三人共出タリ 兩人之物共残念ニ

思五左衛門を追出タリ

この「乍恐口上書」は、異国人に対する東京通詞魏五左衛門の再度の通弁の許可を、モウル通詞中原松之介と暹羅通詞森田次太夫が立合いで五左衛門の後見役として町年寄高嶋八郎左衛門と福田十郎右衛門へ願ひ出たものである。町年寄から奉行水野若狭守へ届けられ、許しが出たものと思われる。押印されているがこれは控えである。

細字の書入れ※印Aによれば、次のような経緯が知られる。天明

七年六月二十四日夜七ツ時分、召されて異国人と対面し、東京口で通弁を試みたが言葉は通じなかった。その後、唐人屋敷に帯在中の六番船の唐人が安南人だろうと風聞している。私の先祖は東京人であるが、わが家には安南口も伝来しているので、もう一度通弁の機会を与えて下さいとモウル通詞、暹羅通詞の連名で願ひ出た。※Bによれば、幸い許可が出て、七月十二日出嶋の鮫藏の二階にいた安南人と再度応対し、通弁したところ、長い「語談（会話）」は判らなかつたが短い事は少し判った。御檢使役の二人、阿蘭陀方役人は日用の物を見物、異國通詞二人は五左衛門を促し、三人でその場を立ち出でた。

およそ右のような経過であるが、東京語に加えて安南語を心得ているはずの五左衛門は通弁がかなわず、面目を失なつたのである。

寛政五年（一七九三）四月十四日、三十七歳の五左衛門は、事実上東京通詞は閑職につき、唐方の見習通弁をさせられることになる。『長崎志統編』卷十〈年表摘要〉に次のように記す。

四月十四日、東京通詞魏五左衛門、當時本役勤向無之三依テ、

唐方諸役場<sup>ニ</sup>出勤致シ見習通辨等可心懸旨被命之且手當、年々

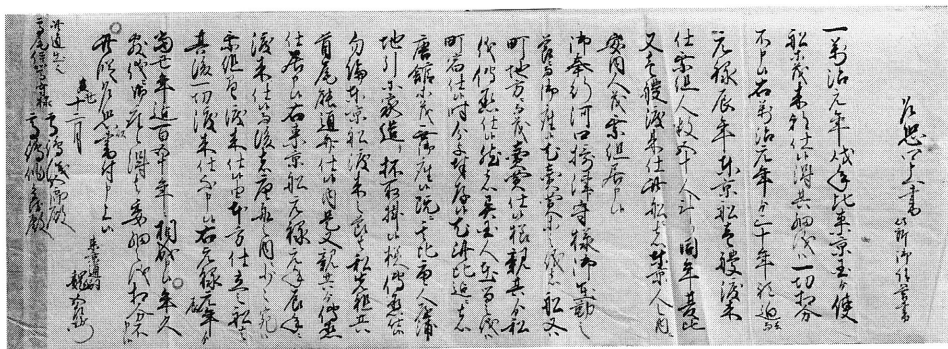
銀百目宛賜之

本役の東京通詞の仕事はなく、唐通事見習として手当も年に銀百目に減給されたのである。宝暦五年（一七五五）以来、入港唐船は年に十二、三艘、蘭船は一、二艘の時代であつたから、やむを得ない事態というべきであろうが、遺憾この上ないことであつたろう。

同年六月八日、箱館にロシア船が入港し、目付石川忠房が松前で

使節ラスクマンと会見。信牌を与えて長崎入津を許可することになった。そのために通詞たちは奉行高尾伊賀守へ心得書を差し出した。前掲『古文書集』1に貼布された文書の一枚に、信牌を改める際に役人に同行せよというものがある。「其節紅毛大小通詞之内式人、唐大小通事之内式人、異國通詞三人何れも差添被候間相心得被可 以上 寛政五年 寅十月」という。ここにおいて異國通詞の存在意義が少し見直されることになった。

魏五左衛門は父祖の代からの東京通詞の家職、通弁の経歴などを記し、町年寄及び長崎奉行高尾伊賀守へ「口上書」を差出した。暹羅通詞、もうる通詞も同様である。次は『古文書集』1に貼布の魏氏文書（写真③）である。



③ 乍恐口上書（武藤文庫『古文書集』1）寛政五年十二月

# 乍恐口上書

一萬治元年戌年比東京国が使

船等も来朝仕候得共細儀ハ一切相分

不申候右萬治元年が三十年程廻去而

元禄辰年東京船老艘渡来

仕乗組人数五十人計り同年夏比

又老艘渡来仕此船三者東京人之内三

安内人も乗組居申候

御奉行河口撰津守様御在勤之

節二而御座候尤賣買等之儀者船又ハ

町地方二而も賣買仕候様親共が私

儀傳承仕候然者呂宋国人在留之儀ハ

町宿仕候時分と奉存候尤此比迄三者

唐館等も無御座候既二其比唐人屋鋪

地引等家造り扨取掛候様傳承仕候

勿論東京船渡来之節者私先祖共

首尾能通弁仕候内是又親共が傳承

仕居申候右東京船元禄元年辰年二

渡来仕候而後者唐船之内二少々宛ハ

乗組間々渡来仕候由本方仕立之船者

其後一切渡来仕不申候右元禄元辰年が

當丑年迄百五十年二相成申候〇年久

此訴御請覚書

敷儀ニ御座候得者委細之儀相分不申候

○此段乍恐以書付申上候

丑十二月

東京通詞

魏五左衛門

高嶋儀五郎殿

高嶋作兵衛殿

此通書也

高尾伊賀守様

右の「口上書」は下書として残されているものであろう。文面にある万治元年（一六五八）の東京国からの使船というのは、同年六月二十四日に台湾から来航した国姓爺の使船をさすようである。また元禄元年の東京船については記録を欠いていて確認できない。しかしながら先祖の魏五平次以来の通弁の活動については「傳承」とことわりながらも、代々その役目を果たしてきたことを強調している。

『長崎志編編』卷十〈年表挙要〉には、この翌々年、すなわち寛政七年（一七七五）の条に次の記事が出る。

一東京通詞魏五左衛門、暹羅通詞森田次太夫兩人<sup>エ</sup>通辨書ヲ編輯シ、非常之節ノ為御役所<sup>エ</sup>可納置旨被命付各譯詞書ヲ謄写シテ奉之、仍テ筆紙料トシテ五左衛門<sup>エ</sup>銀老枚、治太夫<sup>エ</sup>金貳百足賜之

これは『譯詞長短話』編纂にかかわる記事で、長崎奉行高尾伊賀守（寛政七年二月五日転出）及び平賀式部少輔、中川飛騨守から命じられ、非常事態の際に備えて「通辨書ヲ編輯」することになったことをいう。

現在長崎県立図書館に伝存する『譯詞長短話』（枅型本一冊「小卷二欠」、大本三冊）が右の提出した「譯詞書」に該当するものとみてよいだろう。すでに大橋百合子氏が右の経緯を推定するとともに、小巻一については解説、翻字を試みられているので内容については御参照いただきたい。

ところで『長崎志統編』のこの記事は、寛政八年の条に入るべき内容であろう。最後に『譯詞長短話』の書誌を記すが、寛政八年八月二十八日に清写したものであり、「筆紙料銀老枚」を頂戴したのはその後のことである筈である。『長崎志統編』の編纂者が寛政七年の条に記入したものと思われる。

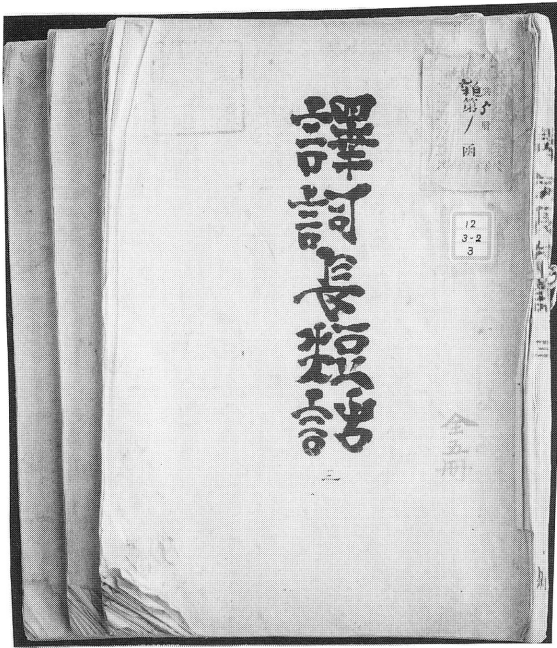
次に『譯詞長短話』の書誌を記載しておく。

譯詞長短話（写真④⑤）長崎県立図書館蔵（12・23）

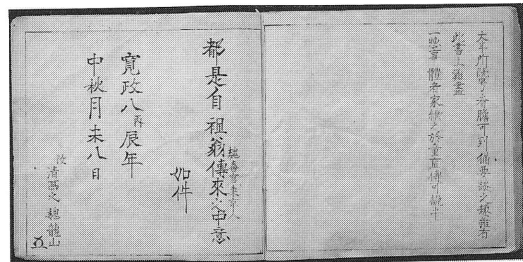
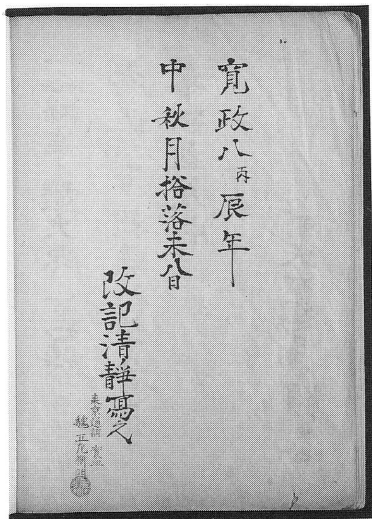
写本四卷四冊現存（卷二欠）

書型 枅型本（縦十五・三 cm × 横十六・五 cm）一冊、特大本（縦三十・五 cm × 横二十二・〇 cm）三冊存。本来枅型本二冊、大本三冊の五冊本であった筈だが第二冊目欠。全冊紙縫仮綴。各冊とも裏の綴目に魏氏の丸印を押す。

表題 表紙は素紙、中央に墨で打付け書き「譯詞長短話 一（一五）」（二欠）。第一冊目右下に「全五冊」と朱書。



④ 『譯詞長短話』第三、四、五冊大本、同第一冊枅型本 長崎県立図書館蔵



⑤ 『譯詞長短話』第五冊識語

同第一冊識語

第一冊 枅型本。全39丁（墨付37丁、前後遊紙2丁）扉題「譯蜜大

諫長短話<sup>五冊之内</sup>／<sup>小巻一</sup>」（中央に子持杵、一才）。以下全丁墨

引匡郭（縦十三・八cm×横十四・六cm、四周単線）を付す。

巻頭に梵字、梵語を掲げ、諸国仏神及び言語の根元であるこ

と等を説き、三漢をはじめインデヤ、南蛮、モウル、暹羅、

東京の文字、言語の音律、清濁等の概要、あるいは本書に八

分字、古文字様に記述する大概を記す（一十五ウ）。次に「縦

横 長短話<sup>小</sup>」と扉題し、「譯詞并蛮語之難話<sup>小</sup>」と内題。以

下「天長地久」等の例文の発音を右側に中華、安南、東京、

左側にもうる、阿蘭陀、南蛮（イスバニヨ）を配置するとい

う凡例をおき、以下に語彙、短話を掲げる（一三二才）。小

二冊は「諸攤之諺話」（諸国の言語）、大三冊は東京語二冊と

ハルシイ海外の言語。総計五冊揃。ナム号、シヤム号計十二

冊を三冊に合諫したものという。巻末に「都是自祖翁（魏喜

官東京人）傳來之中意如件／寛政八<sup>丙辰年</sup>／中秋月末八日

／<sup>改清寫之</sup> 魏龍山（花押）」とあり、初代魏喜（五平次）

からの伝来の辞書を五冊に編纂したことを記す。本冊二十丁

目袋綴の内側に次の貼紙をする。「寛政八<sup>丙辰年</sup>八月大吉祥

日譯詞書五冊 御役所寶藏三預ヶ置魏之家三入用之節者何時モ

無異儀直ニ請取約束之書／（梵字）妙音神通力 魏五左衛門

當辰四拾才寫之置／猶善惡非常之事ニ付萬一役儀召被上役儀ニ離

別於到者時日ヲ不移請取約定勿論御役者御上之役書物者魏祖

之物也先祖ヨリ申傳此談申置」。すなわち命を受けて寛政八

年七月二十八日に清書し、八月吉日に『譯詞長短話』五冊を

役所へ提出した。但し先祖伝来の書物であるから役所の宝蔵

へ預けておくだけで、必要が生じたら異儀なく返却してもら

う約束である。万一役儀が召上げられた場合も同様で、通詞

職はお上の役儀であるが『譯詞長短話』は魏祖のものである、

と記している。魏喜伝来の家職を守ろうとする五左衛門の強

い気概を示す書置きといえよう。

第二冊 欠

第三冊 大本。全40丁（墨付35丁、白紙5丁）。「譯詞長短話 三」

（表紙中央打付書）。内容は「天地交通／降／行」「輸入性得

／高下／異名」「五穀吃／野菜／食邊」「身邊／衣將／鍔忍當

用行李話」「神邊／儒具／佛媽」「寶器／菓石竹木／菓財足頭」

「疋頭并五色／種々／色達」。巻末に寛政八年中秋の第一冊

目と同様の識語。

第四冊 大本。全40丁（墨付37丁、白3丁）。内容は「三拾貳箇國

横詞」「日本異國問々話」「有無 喜惡 話」「色姪 邊話」

「想量 邊談々話」「船 河下邊話」「諸 雜集長短話」。巻

末に第一冊と同様の寛政八年中秋の識語。

第五冊 大本。全40丁（墨付38丁、白2丁）。内容は「老貳參貫目」

「秤物／所数」「賣買」「講價塊」「算談」「金銀錢」「昼夜」「天

地／日月」「降物」「談話」「船場談話」「拾貳月」「國名」「人

躰異名」「老若男女」「本末生死」「陳器械」「衣服」「行李刃

物」「武器軍用」「船 船具名」「山海<sup>地理</sup>」「山林名」「魚鳥」「鳥

畜」「虫類」「喰養吟味類」「野菜喰」「疋頭名」「薬財」「香木」など。卷末識語に「一各様事體大要々有口傳了／都是自祖翁（魏喜官）傳來書本也 奉敬說這件 野大有趣尾々觀喜々」とある。また同じく「寛政八丙辰年／中秋月拾落未八日／改記清静寫之／東京通詞實血 魏五左衛門（印）」と記す。

注

- 1 「東京通事魏龍山遣写本『譯詞長短話』に就きて」（『西南文運史論』大正十五年六月、岡書院刊所収）。
- 2 『長崎洋学史』上（昭和四十一年三月、長崎文献社刊）第一章七「魏五左衛門の南詞襍解」。
- 3 「帰化唐人の日本學研究（魏氏の譯詞長短話）」（『長崎談叢』第三十四輯、昭和十九年八月）。
- 4 「魏氏の用いた特殊な音符について——「訳詞長短話」を資料として——」（『長崎県立国際経済大学論集』第八卷第二号、昭和四十九年九月）。「魏氏と『魏氏楽譜』——徳川時代の中国語——」（『同』第九卷第三・四合併号、昭和五十一年三月）。
- 5 「唐通事の語学書——『訳詞長短話』管見——」（『語文研究』第五十五号、昭和五十八年六月）、「方言資料として見た長崎通事の語学書——魏龍山『訳詞長短話』及び岡島冠山の著作など——」（『同』第五十九号、昭和六十年六月）、「魏龍山『訳詞長短話』——翻刻と解題——」（『江戸時代文学誌』第四号、昭和六十年十一月）。

- 6 「長崎大学附属図書館・経済学部分館武藤文庫所蔵文学・語学関係貴重資料」（『長崎大学貴重資料』（平成七年三月）。
  - 7 『唐通事家系論攷』（昭和五十四年十二月、長崎文献社刊）。
  - 8 『寛宝日記』天和元年の条に暹羅通詞、東京通詞は「役料唐人前銀拾枚宛」とする。また「通航一覽」卷百四十八には『長崎分限帳』を引き「暹羅通詞一人〇一同二百六十目、三人扶持東京通詞一人〇一同二百目 モウル通詞一人」と記す。後の資料は寛政期に減額されたものであろう。
  - 9 『譯詞統譜』（『長崎県史』史料編第四）
  - 10 宮田安『長崎崇福寺論攷』（昭和五十年八月、長崎文献社刊）五二七～五三〇頁。
  - 11 長崎県立図書館渡辺文庫「檀林家系 外」（渡辺庫輔氏ノト）。
  - 12 松野一郎『安東省菴』（平成七年十一月、西日本新聞社刊）八八～八九頁。
  - 13 『唐通事会所日録』第三卷（東大出版会）（二七六頁）。
  - 14 注3参照。
  - 15 前掲『江戸時代文学誌』第四号。
- 「付記」資料の閲覧、掲載を許された長崎県立図書館、長崎大学経済学部図書館武藤文庫に御礼申し上げます。

（一九九六年十月三十一日受理）